

## 言語習得の型とその特徴

呉工業高等専門学校

山岡俊比古

### 0 はじめに

言語習得にはさまざまな型がある。この型の違いを表わすのに一般的に第一言語、第二言語、外国語などの語が使われるが、これらは必ずしも明確に定義づけられたものでない上に、存在する言語習得の型はこの3つの用語で説明できるほど単純なものではない。例えば、第一言語習得といってもごく通常の母国語習得に対して、思春期を越して初めてことばの習得を始める異常な場合があり、外国語習得も年齢、環境、習得の方法などで異った型を示す。

言語習得の型の分類とその特徴の把握は次の点できわめて重大な意味を持つ。つまり、すべての型の言語習得はその言語の規則を発見しそれを内在化して行くという基本的な過程においては共通したものであると言えるが、規則の発見に到る過程やその内在化を実現するのに必要な過程などにおいては、各言語習得の型においてそれぞれ特有なものを持っていると考えられる。従って、我々にとっての英語教育が持つ型を、他の言語習得の型との対比において把握することが必要である。この観点から、いずれ綿密に言語習得の型を分類することが必要となるであろう。

綿密な型の分類をするためには、それを決定づける数多くの要素を抽出しなければならないが、この中には少くとも年齢（思春期の前か後か）、既存言語（すでに1つの言語が習得されているかどうか）、言語環境（その言語の話されている環境の中で習得が行われるかどうか）、方法（学校などにおけるように正式な教授を受けるのか、あるいはその言語環境の中で自然に習得して行くのかどうか）などの要素が含まれるであろう。

Lamendella (5: 155-196) は言語習得の型を2才から5才の間にそのことばの基本がすべて自然に習得される Primary Language Acquisition と、それ以外の Non-Primary Language Acquisition とに大別し、さらに後者を習得される言語知識の神経機能的状態によって Second Language Acquisition と Foreign Language Learning に分類している。ただし、習得の環境および習得の仕方の違いを原因とし、その結果としての言語知識の神経機能の違いをもって分類の基準とすることに対しては疑問がある。つまり、その結果は条件の違いによる必然的なものか、ただ単にそうなりやすいとだけするものかという点に関して議論の余地があるからである。しかしいずれにしろ日本の英語教育において、ほとんどの学習者の頭の中で英語の知識は Lamendella のいう知的なものとしての神経機能の体系のままとどまっているというのは、現実の事実であるという点に注目しておく必要があると思われる。

現在日本で行われている英語教育は、すでに日本語という言語を習得しており、思春期の後に行われ、日本語という言語環境の中で、通常学校において形式的教授を受けるという特質を持っている。この日本の英語教育において行われている言語習得の型を Lamendella にならって外国語学習と呼ぶことにする。そして Lamendella のいう第一次言語習得を母国語習得と呼ぶ。

以下では我々が最もかかわっている外国語教育としての日本の英語教育を考える際に、対比上興味ある言語習得の型をいくつかとりあげて考察し、最終的に日本の英語教育にとっての結論を導きたい。

## 1 母国語習得

母国語習得は最も自然な言語習得である。従って、この型の言語習得は最も基本的な習得のメカニズムを明らかにするものとして注目に値する。この分野を研究対象とする発達心理言語学は近年大きな進歩をとげたと言われるが、同時にその中の数多くの研究ははまだ群盲象をなでる域を脱していないとも言われる。しかし、いわゆる人間の生得的言語能力として提示されたものは恐らく間違いのないものであり、かつすべての型の言語習得に対して最も基本的な提言となり得るものである。これは、子供は自分の周囲の人々のことばをまね、彼らから教え込まれることによってことばを習得して行くという通俗的で行動主義的言語習得観と対峙されるもので、子供は環境に対して受身的ではなく、自ら働きかけることにより自らがことばを発見して行くものである。このことを支持するものとして次の2つの事実が挙げられる。まず第一に、地理的にも離れた何の関係もない3人の子供による英語の14の形態素の習得順序の相関が、3人相互の間できわめて高いということ(4: 91)と、次に、母親は子供の不完全な発話を完全なものに言い直して聞かせることが多いが、子供がこれに対して期待通り反応する場合は全体の1%程度しかないこと(8: 119)である。これはいずれも、子供の言語習得が環境に全く依存しているのではなく、むしろ子供自身の持っているとも言えるプログラムに沿って言語の習得を行っていることを示すものである。結論的に次のように言うことができよう。ことばは教えられるものではなく、自ら発見して行くものであり、それを可能にする能力が人間に備っている。

## 2 Genie の場合

通常の母国語習得が誕生時からおよそ5才までに一応その基本がマスターされるのに対し、きわめて希な場合として、かなりの年齢までことばに触れることなく、その後初めてことばの習得にとりかかる場合がある。このような事例はこれまでもいくつかあったが、いずれも時代がやや古く科学的な観察と記述に欠けていた。ところが比較的最近、アメリカで13才半になるまでことばに触れることなく過した少女 (Genie) が発見され、その後のことばの習得が十分科学的に観察され記録にとどめられた。この事例は Lenneberg が提示した、言語習得には臨界期 (critical period) が存在するとする仮説の検証という意味できわめて興味深いものである。

Genie がその後のことばとの接触の中でことばを習得しているかどうかという問題は、ことばとは何かという捕え方によって異った結論が出てくるが、少なくとも Genie のことばが、一般的にみられる言語異常が持つすべての特徴を表わしていること (3: 209) から、彼女のことばはまともなものとは言えない。さらに、dichotic listening という手法を使う神経言語学的な実験から Genie のことばは右半球で処理されていることが明らかとなり、この異常性の原因は、通常言語野がその未使用と抑制のために一種の機能衰退を起したものと説明される (3: 216) 。これはまさに Lenneberg の仮説、つまり臨界期の間にことばは習得されないと永久にことばを習得することはできないとする考え方を支持したものである。

## 3 日本における英語教育

### 3.1 臨界期と外国語学習

上で述べた臨界期の仮説は、その人にとっての最初の言語習得についてあてはまるものであることに注意しなければならない。第二言語ないしは外国語の習得にあらわれる母国語なまりと年齢との関係などから、臨界期説を一挙にどの型の言語習得にもあてはまると考えるのは誤っている。Lenneberg 自身も「人は40才でも外国語をコミュニケーションできるように学ぶこと

は可能である。このことは年齢制限に関する我々の基本的仮説にとって何ら問題とならない。なぜなら、言語習得に必要な脳の構成自体はすでに子供時代に行われており、さらに自然言語は多くの基本的な面において互いに似かよっているから、言語技能の基盤が存在していると考えることができるからである。」と述べている(6: 176)。

### 3.2. 外国語学習と心理的・社会的要因

上の主張にも関わらず、移民家族の中でよく観察される、子供は容易に新しいことばを習得するが、大人は容易でないという事実がある。臨界期説を採用しないとするとこれはどのように説明されるべきであろうか。

まず子供が母国語を習得する際の環境の果す役割を知らなければならぬ。子供が周囲から与えられることばを第一次言語入力 (Primary linguistic input) と呼ぶが、この入力は非文法的な文、躊躇した表現、いい直しなどをかなりたくさん含んでいると考えられていたが、新しい研究によって事実は逆であることが明らかとなった。つまり、ある調査によると、3人の母親のそれぞれの子供に対する合計1,500の発話のうちあやまちを含んだ発話はたった1つであり、また、1,500の発話の34%は何らかの繰り返しであったという(4: 42)。このことは、子供は周囲から完全に非常にいい言語入力を得ていることを示している。

子供の言語習得においてその環境は具体的で直接的である。そのような環境の果す役割は重大であり、例えば Macnamara は次のように述べている。「幼児は母国語をまず第一に話者が自分に伝えようとする意味をことばそのものに頼ることなく決定し、その後自分の聞いた表現と意味との関係を見つけ出すのである。言い換えれば、幼児は意味を決定する1つの鍵としてことばを使っているのではなく、むしろことばに対する1つの鍵として意味を使っているのである」(7: 250-254)。これを可能にしているものが具体的で直接的な環境である。

以上2つの要素は大人による新しいことばの習得においては必然的に伴われるものとは言い難い。むしろ大人はその社会的、心理的な状態の由に子供の言語習得の状況を再現するのは不可能であると言ってもよい。従って、移民家族にみられる大人と子供の差を安易に比較し、子供の言語習得能力の優越性を結論づけるのは慎まなければならない。この差は大部分が大人は心理的にも社会的にも子供のようにはなれないということに起因しているのである。

### 3.3. 正式な教授 (formal instruction) の必要性

すでに述べたように子供は母国語を習得する際、そのことばの仕組みを発見する手がかりとして、環境から与えられる意味を利用しているが、大人の場合、このような状況を再現することが社会的にも心理的にも不可能である以上、ことばの仕組みを発見するために何らかの手立てが構じられなければならない。この意味において大人の場合、ことばの仕組みの発見に到る体系だった正式な教授が必須のものとなる。ただし、この教授はことばの仕組みを学習者に教えるものではなく、学習者自身によるその発見を導くものであるという点に注意しなければならない。

### 3.4. 既存言語の持つ意味

すでに1つの言語を習得し内部に保持している大人の場合、この既存言語の持つ意味は重大である。まず、上で述べたような正式な教授を受けるのを可能にしているのが、既存言語の習得と同時に進んだ一般的知的能力である。さらに Lenneberg の上の指摘のごとく、すでに1つのことばを習得したがゆえに、生得的言語能力の機能が保持されているのである。また、新しいことばの仕組みを発見する際、少くともそれがすでに学んだことばの仕組みと同じかどうかという比較的な視点が与えられていることになり、すでに学んだことばは新しいことばを発見

する際の1つの基準となる(2: 161-170)。

以上のことから、大人はすでに母国語を習得しているにもかかわらず、新しいことばを習得できるのではなく、母国語をすでに習得しているがゆえに新しいことばを習得できるのである、ということが出来る。

### 3.5. 言語的発見と言語的体験

ことばの習得過程を大きく2つの面に分けるとすると、ことばの仕組みを発見する面(言語的発見)と、その仕組みを心理的実在なものとして内在化する面(言語的体験)があげられる。子供による母国語習得と大人による外国語学習の最も大きな違いは、前者の場合、この言語習得の2面が表裏一体なものとして同時に進行するのに対し、後者の場合は両者が必ずしも一体化しない点にある(9: 13-25)。言語的体験とは、教室で学んだことを実際に使ってみるといった程度のものではなく、自らの意図(intention)を最終的言語形式へ実現する際の規則(realization rule)の運用を体験するという意味であり、Carrollのいうcognitive habit formation(1: 101-114)で目標とされるものと同様のものである。

### 3.6. まとめ

以上の考察から、日本の英語教育について次のような点をまとめて述べる事が出来る。

- (1) 臨界期は母国語習得にあてはまり、外国語学習にはあてはまらない。なぜなら後者の場合、すでに1つの言語が保持されており、その習得が体験されたからである。
- (2) 外国語学習と母国語習得は、双方とも言語的発見を達成するという点において基本的に同じ過程を持つものである。ただし、その言語的発見を促すものの性格は異なる。
- (3) この違いは学習者の必然的な心理的・社会的要因によるもので、人間の言語能力の機能衰退によるものではない。
- (4) この特性は学習者が正式な教授を受けることを必要とさせ、これは学習者が十分な知的発達をとげているので可能となる。
- (5) 外国語学習と母国語習得のもう1つの大きな違いは、前者の場合、言語的発見が必ずしもその体験を伴わないことであり、従って、外国語学習の場合、学習者はその体験を積む機会を与えられなければならない。
- (6) この言語学的体験は表面的なものであってはならず、意図をその最終的言語形式へ実現することが体験されなければならない。

## 参考文献

- 1 Carroll, J.B. (1971) "Current Issues in Psycholinguistics and Second Language Teaching," *TESOL Q*, 5, 2, pp. 101-114.
- 2 Corder, S.P. (1967) "The Significance of Learner's Errors," *IRAL*, 5, 4, pp. 161-170.
- 3 Curtiss, S. (1977) *Genie: A Psycholinguistic Study of Modern-Day "Wild Child"* New York: Academic Press, Inc.
- 4 de Villiers, J.G. and P.A. de Villiers (1978) *Language Acquisition*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.
- 5 Lamendella, J.T. (1977) "General Principles of Neurofunctional Organization and Their Manifestation in Primary and Nonprimary Language Acquisition," *LL*, 27, 1, pp. 155-196.
- 6 Lenneberg, E. H. (1967) *Biological Foundations of Language*. New York: John Wiley & Sons, Inc.
- 7 Macnamara, J. (1973) "Nurseries, Streets and Classrooms: Some Comparisons and Deductions," *MLJ*, 57, 5-6, pp. 250-254.
- 8 Menyuk, P. (1971) *The Acquisition and Development of Language*. Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, Inc.
- 9 山岡俊比古 (1979) 「外国語学習の過程と教育的意義」『呉工業高等専門学校研究報告』第14巻, 第2号, 頁13-25.